



干潮時には多くの干潟ができる

ジャマイカ・ベイ

泉 重 雄
梅 田 安 治

☆……☆ 都市周辺の自然

一九八〇年八月、米国で開かれたある国際会議に出席の途次、ニューヨークを訪れたときのことである。大都市のコン

クリートジャングルをさまようよりも都市周辺の自然をたずねてみようということになり、地下鉄の上の野生生物保護区として、また、ゲートウェイ国立レクリエーション地域として知られるジャマイカ・ベイを馳け足で一巡してみた。その時の印象と地域の概要をとりまとめてみたので、ご紹介する。

ニューヨークの表玄関ともいべきケネディ国際空港を築着するとき、眼下に半円形の潟と点在する緑の島々と、それらを縫うように湾の中央を横断するハイウェイを認めることができるだろう。この湾と周辺の海浜を含む、およそ一万haの拡がりがある。

私たちが乗せたイエローキャブがマンハッタンの都心を出て、イースト川に架かるクイーンズボロー橋を渡り、クイーンズブルバード、クロスベイブルバードなどの高速道路を駆けぬけ、ショアパークウェイを交差すると、そこがジャマイカ・ベイの入り口であった。つまり都心からケネディ国際空港へ向う道をたどり、空港の手前右側の方向に位置し、都心からの距離は、わずか二〇kmに

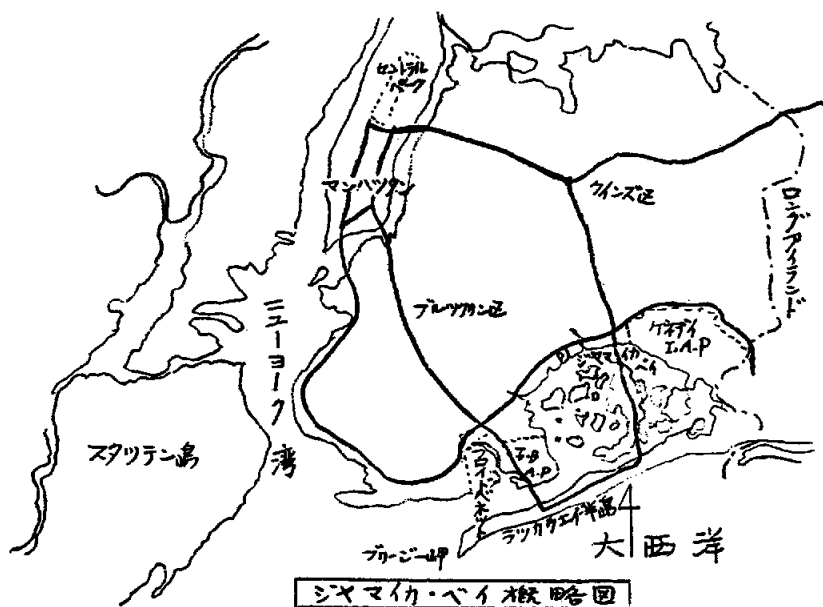
過ぎない。案内書によるとIRTまたはINDの地下鉄も通じていると記されている。

☆……☆ ジャマイカ湾の生成

一万七千年のむかし、北米大陸における氷河期の終りの頃、氷河がもたらした残滓堆積物の氾濫原へ、溶け出した氷河の流れや隆起した海水が流れこみ背後のロングアイランドと、南側に延びるラッカウェイ半島によって入江を形成し、今日のジャマイカ湾が生れた。湾内には堆積物が積み重なり、ネットワーク状に連なる低く平らな多数の島々の土台となった。島を覆う植物は、主としてロングアイランド、ニュージャーシー、コネチカットなど米大陸東海岸に多く分布するイネ科植物のスパルティナ・アルティニフローラと称する耐塩性に富む植物と、乾燥に強い小型のスパルティナ・パテンスと呼ばれる植物から成る。この植物は陸から海へ流れ出る堆積物と海から押し寄せる砂を固定し、さらに強い繁殖力をもって殖え続ける。その遺体は永い歳月にわたって積み重なり泥炭状の層を形成し、浅瀬に数十種類の藻類やプランクトン、微生物の繁殖を容易にした。さらに、順次食物連鎖生物として貝類、カキ、カニ、魚類、シギ、チドリ、カモなどを養い、その数も何世紀にもわたって増加した。

これらの魚介類、鳥類は、初期原住民であるキャナシー族やラッカウェイ族

などをはじめ、初期開拓者として足を踏み入れたオランダ人やイギリス人たちの豊富な食料となった。また、スバルティナ・パテンスは彼等の家畜の飼料として調法がられたという。数年前までジャマイカ湾の漁獲高は、アメリカ東海岸ではグレートサウスベイ、チェサピークベイに次いで第三位にランクされ、この地方の産業は大規模な水産加工業によって支えられていた。



☆..... ジャマイカ湾の環境保全

ジャマイカ湾の自然環境へのインパクトは、いまからおよそ百年も前から現われはじめた。すなわち、ニューヨークの都市化にともなう下水やゴミの流入、ロングアイランド鉄道の開通新興海水浴場とパークス客たち、工業港建設計画、鉄道沿線に伸びる住宅建設などである。一九三一年には湾の西側にニューヨーク市の最初の空港としてフロイド・ベネット空港が開かれ、また一九四八年には湾の東岸に一千八百haの広さをもつ現在のケネディ国際空港の建設によって、自然破壊は最頂点に達した。さらに、ニューヨーク市がジャマイカ湾を都市ゴミの埋立地に指定しようとしたときには、市の公園局長を先頭に市民が反対運動を展開し、これを阻止したという。一九五〇年頃、湾内にかかる高架鉄道の木造構脚の火災焼失を契機に地下鉄を布設することになったが、その浚渫作業を利用して湾内の一部に土手を築き、二個の淡水池を設けることを条件に地下鉄工事の着工を認めることにした。同時に島々には下水処理廃棄物をパイプで送り込み砂の島を肥沃な緑地とすることに成功し、いろいろな鳥類の繁殖が可能となったが、周辺環境の悪化から自然を保全するべく、一九五三年に市公園局は、ジャマイカ湾野生生物保護区を設定した。

保護区の初代管理者となったハーバード・ジョンソン氏は、大へんユニークな獨創性に富む人物だった。彼は試験場に勤務してゴルフ場の芝生の研究をやるかたわら、独学で園芸に関する学位を取得しているほどであったが、動物や鳥類に関しては全くのしろうとだった。しかし、砂浜へのイネ科植物の移植と固定、淡水湖への水草や藻類の移植、冬季間の野鳥への餌づけ、オートムオリーブ、ハマナス、ノバラ、グミ、ハマスモモ、アメリカヒイラギ、ヤマモモなどの植樹等、野生動物の繁殖や避難のために有効なさまざまな手段を講じたのであった。その結果、六〇種ほどだった鳥類は三〇〇種を超え、また、リス、ネズミ、ウサギなどの小動物も年毎にその数を増してきた。

こうしてジャマイカ湾は豊かなイネ科植物や木の実、昆虫、カエル、カニ類

小魚など自然の給餌に恵まれ、ユキコサギ、ダイサギ、ヒメアカクロサギ、アメリカサゴイ、ヒメヨシゴイ、パン、オビハシカイツブリ、アメリカガモ、アメリカソリハシセイタカシギ、その他多くのカモ類、シギ類などの水鳥の繁殖地となり、また、カモメ、サギ、アジサシなど海鳥の巢となった。さらにハクガン、シジュウカラガンなど、多数の南北を往き来する大西洋渡り鳥の中継地として格好の場となった。

☆.....☆ 野生生物保護区と国立レクリエーション地域

その後、ケネディ国際空港の拡張、人口増加、水質汚染等の環境悪化はまぬかれなかった。一九七四年に合衆国国立公園局は、この野生生物保護区を含む約一万haの区域をゲートウェイ国立レクリエーション地域として指定した。国立レク地域設立の目的とその役割は、「傑出した自然と、レクリエーション向きの地形と特色をもつ一定の区域を占有し、現代及び未来の世代のために、これらを利用し享受できるような地域を保全し禁猟とする。また、この特定地域が都市住民のレクリエーションの要求を満たす義務と、米国にとって大へん意義深い自然地域として一般の使用を禁止し、アメリカ市民が人間としてのよりよき生活設計の一助となる重要な性格を兼ね備えているものである」としている。

ゲートウェイ国立レク地域は、ジャマイカ・ベイ、ラッカウエイ半島の先端に位置するブリージイ・ポイント、ニューヨーク湾をへだてて西側のスタットン・アイランド及びサンデイ・フックの四つのユニットから成っており、いずれの地域も来訪者のために水泳、陸上競技、ピクニック、散歩、サイクリングなどの陸上及び水上活動の設備を整えているほか、各ユニットがそれぞれ特色のある施設を有し、都市生活者が自然に親しみ、野外生活の体験を積むために必要な機会を提供している。入場料は、すべて無料である。

☆.....☆ ジャマイカ・ベイ、ユニット

このユニットは、ニューヨーク市のブルックリン区及びクイーンズ区に含まれて位置する。すなわち、北はショア・パークウェイが境界を形成し、南はラッカウエイ半島、東側はケネディ国際空港、西側はプラムビーチ及びフロイド・ベネット広場を含む範囲にある。フロイド・ベネット広場は、ジャマイカ・ベイの中で最も広大な区域を有する地区で四〇〇haの広場は、集中的レクリエーション、学習及び文化活動に最適な地域である。ユニット内の約三千六百haに及ぶ沼地と水域は、野生生物保護区を国立公園として管理するこの種では最初の地域であり、他に比類を見ないほどの生活力を保っている自然の実験室として、ニューヨーク市内及び近郊に住む多くの小学生がここを訪れ、鳥の観察、保護、自然環境に関する教育、海の科学等の体験を積むなど、教育的価値も極めて大きい。また、この世界有数の野鳥の聖域を観察するために訪れる全世界からのアマチュア及び鳥類学者などの数は、毎年一〇万人を超えるほどである。

われわれが訪れたときは、八月にしては涼しい曇天の日の午後であった。車を降り、保護区への入り口に当るノースチャンネルブリッジを徒歩で渡る。橋上は釣り糸を垂れる少年たちでにぎわっていた。ケネディ空港を発着するジェット機が間断なく排気音を響かせて飛び交うその下を、名も知らぬ水鳥が一羽また一羽、ゆうゆうと舞うように翔んで行く。水辺にはカモメの群れが餌をあさっている。水面上に運らなり、または点在する島々はヨシの生い茂る、なんの変哲もない平らな小島という感じである。岸辺の各所には、レク施設やボート乗り場などが見えるのだが、一万haに及ぶ広大な地域に遊ぶ人たちは、一体どこにいいのか見当もつかない。はるか彼方には、魔天楼がかすんで見える。その都心からわずか二〇kmの地点とは考えられない静寂があった。

レク地域のビジターのための注意書きがある。ちよつと面白いのでその一部を紹介しよう。

「あなたの安全のために」

一、すべての活動を楽しむため、自然災害及び事故からあなた自身を守るために注意深く行動してください。

一、水泳は看視員がいるとき以外いけません。

一、海岸では、ガラスコンテナ、いかだ、ゴムチューブ、マスク等は使用禁止です。

一、陽やけのしすぎにご用心。

一、貴重品は車のトランクに入れ、必ずロックをしてください。

一、くず物は適当な容器に入れて保管してください。

一、沿岸の芝生が燃えるから、たき火は禁止します。グリルかヒパチを持参してください。

一、犬は革ヒモでつなぎ、指定の道路以外の通行を禁止します。

一、動植物等は、どんな手段でも、これに損傷を与えたり持ち去ってはいけません。

一、ツタウルシの群落が数か所あります。接触を避けるべき自然の事物への注意やツタウルシのありかは公園職員におききください。

☆…………… おわりに

東京湾大井埋立地は、およそ七〇haの広さがあるそうである。十年ほど前、埋立工事現場の水溜りに棲むカニや小魚をあさって、水鳥の群れが飛来するようになった。七〇haの埋立地が現在どのように利用されているのか定かではないが、東京都はここに四haの野鳥公園を設けた。この人工の小鳥の楽園は余りにもミニではあるが、小鳥が棲みつき営巣地ともなっているそうである。規模は桁違いではあるが、さしずめジャマイカ・ペイ日本版ともいうべきであろう。

米国における自然保護及び環境保全が、どのような史的展開をたどってきたのか私にはよく解らないが、私たちが垣間見たジャマイカ湾にしても今日までに一〇〇年に及ぶインパクトをはね返して五十数年余にわたる活潑な保護活動

が進められ、絶滅に近い状態にあった鳥類をはじめとする野生々物の聖域を人間の力でとり戻したのである。一例として十九世紀ころ女性用の帽子に珍重され、乱獲の浮き目であったユキコサギは、一九〇〇年代初期には絶滅の危機に瀕したのであるが、一九六〇年には二つがいの生息がジャマイカ湾で観察され、一九七五年には七五つがいの巣づくりが記録されている。また、ここ一〇〇年間その姿を見ることのできなかつたブロンズトキも最近は一〇〇つがいを超えるコロニーを形成するほどに環境を回復した。

人為は自然を極めて容易に、しかも一瞬のうちに無惨なまでに破壊する。自然は脆く人為に抵抗する術もない。しかし、一たん破壊した自然を回復するには永い歳月を費やし、文字どおり世紀の大事業となるだろう。保全すべき自然は、なんとしても護らなければならないことを痛感した。

ジャマイカ湾を巡り、海岸沿いのハイウェイを走り、リパティ島の自由の女神を遠くに望みつつ、ブルックリン・パツテリントンネルをくぐり抜け、マンハッタンの下町への道程は交通量も少なく、快適なニューヨーク近郊のドライブコースとしてもおすすめできよう。

(累一(財)北海道農業近代化コンサルタント・梅田一北大農学部助教授)

引用文献

※オグデン・ターナー著(一九七五)「ニューヨーク・大都会の自然」(タイムライフ社)